

地域における実践から一般性を抽出することを目指した授業づくり

荒井 眞一

一 はじめに

実践報告に先立って、共同研究者前田より総合学習や生活科の授業づくりにおけるアプローチの方法と授業づくりの成果の検討という、本分科会における継続的な研究課題がしめされた。引き続き前田からは、子どもを育てるのに必要な事柄は「読み・書き・算」にとどまらないこと、そして継続的な実践の積み重ねが引き続き求められることなどが述べられた。

以上のような課題設定の下で目指すべき実践の方向性は、社会をより深く見つめる目を養っていけるような学びの創造である。

二 実践報告

1 どうする？キャリア教育

旭川第五小学校・桜岡中学校 鶴野 聖志

鶴野報告は、キャリア教育のあるべき姿についての考察を求めたものであった。

報告者自身が既存のキャリア教育を充実したものにすべく実践を積み重ねていくことの必要性を深く認識している。このような意識を有する報告に対して参加者からは、社会認識の筋道の中で職業に対する理解を深めさせることの重要性が指摘された。

2 空知の農業、食、文化を体感する旅

— 定時制高校「宿泊研修」における

「総合学習」の試み—

北海道江別高等学校 飯塚 正樹

飯塚報告は、定時制高校に勤務する報告者が「定時制高校の生徒だからこそ」見学旅行の場における「本物」との出会いを

した宿泊学習で、理論的な学習をも伴う数多くの体験学習を行った。



通して新しい体験と深い学びに出会う必要があるという問題意識の下で行われた実践の記録であった。

3 中国人女子留学生と交流学習

北海道白樺高等養護学校 亀井 清隆

報告者亀井は交通を通して様々な活動を自主的に行わせ、他

実践目標の達成のため報告者らは東日本大震災後の復興支援に取り組む方々を招いた事前授業を行い、生徒たちが「本物」と出会う機会を与えた。さらに「空知の農業、食、文化を体感する旅」と題

者と関わる力をつけさせることを狙いとしている。その狙いを達成した実践に関して、亀井はここ数年本分科会において意義深い報告を行っている。

今年度報告では、交通情報同好会に中国人留学生らを招いて行った活動の模様について、例年通りの詳細な内容を述べた。

報告資料に記

載されている指導案からは、中国人留学生らとの交流学習の中で生徒たちが、中国の交通事情を中心とした話から、近年の中国で行われた様々なイベントや中国の文化の源流に至る内容にまで学習の内容を深めていったことが確認された。





4 中国・ロシア・日本の生活科の授業

北海道教育大学札幌校 前田 賢次

前田報告は、文部科学省科学研究費助成金を受けて行った、「小学校幼学年期の合科・総合的学習の国際比較と実態調査研究」における途中経過報告であった。

報告者によれば、研究の目的は「低学年という特殊な時期の教育に、発達の論理の独自性と社会的要請と諸矛盾をどのようにに各国の教師たちがとらえ、低学年教育に反映させようとしているのかを検証すること」であるという。この目的の達成のため報告者は、中国・ロシア・日本の生活科の授業の模様をビデオやスライドによってコンパクトにまとめて報告した。

5 船上カメラマンは見た!

乙部町立明和小学校 滝澤 圭

滝澤報告は、報告者の勤務地乙部町の特産物であるスケソウダラを校内で味わう会の主催を起点に、報告者自身の元スケソウダラ漁船主との会談、およびこれまた報告者自身によるスケソウダラ漁船への乗り組みによる漁業体験と遠隔放送による実況中継を中心とした一連の実践の模様を述べたものであった。

船上における様子を中心とした実践の詳細は、スライドや動画を用いて忠実に再現され、子どもたちによる「スケソに触れる」によって完結した。参加者からは、一連の実践を通して明らかにされたそれぞれの人間像の鮮やかさに驚きの声が聞かれた。



6 玉ねぎプロジェクトの途中経過

岩見沢市立日の出小学校 村越 含博

村越報告は、技術的にはきわめて困難といわれた玉ねぎ栽培を、小学校3年生たちが成功させ、最終的には市場で販売するまでの過程について述べたものであった。

報告者や参加者からは、教師の意図した筋道にそって子どもたちに追求させることの重要性や困難さが指摘された。この課題がクリアされたことにより、実践は職位区などといった方向性や、価格という点から追及を深めていくことが可能になった。参加者の多くは、野心的な実践を積み重ねていく報告者に対して、多方向から風穴を開けていくような実践の展開に対する期待の声が寄せられた。

7 サルからヒトへ

夕張市立ゆうばり小学校 齋藤 秀昭

齋藤報告は、「サルからヒトへ」という人類の進化を一連の過程として具体的にしめすことを目指した実践であった。夕張地域では、地域を足場とした実践が1970年代から長く位置づけられてきた。齋藤報告もまた、統合した学校での実践という困難さの下で行われたものではあったが、このような系譜に位置付けられる実践報告であったと思われる。



一一 総括

昨年度・一昨年度に引き続き、今年度参加者数も二桁となった。北海道文教大学生の参加も見られ、分科会における質疑応答にも活気がみなぎっていた。

昨年度から継続して参加された方も複数おり、昨年来の議論の経過を踏まえた有益な議論が交わされた。昨年度から継続して参加された方も複数おり、昨年来の議論の経過を踏まえた有益な議論が交わされた。若手教員による報告と中堅・ベテラン教員の報告がバランス良く配置され、見る側にもとても興味深い報告が相次いだ。

(札幌大谷大学)

齋藤によれば、授業の中の無駄話は重要であるという。このような話がきっかけとなって、地域の畑から採取される石器と授業がつながるような場合があったとのことである。

